

レイドロー博士の足跡と 協同組合運動にこめたもの

大谷 正夫（東京都／協同総研）

はじめに

A.F.レイドロー博士（以下レイドロー氏）について、彼の協同組合運動における活動の軌跡と、その中にこめられたもの、そしてそのバックグラウンドとなる諸事実や、彼のいわばパーソナリティのようなものまでも含めて紹介してほしいと、事務局より依頼を受けた。

早速に資料集めに取りかかったが、殆どと言っていいほど、そのようなものは入手不可能であった。彼がかつて関係したことのあるカナダの協同組合連合会（CCA）や、幾つかのカナダの大学に問い合わせても、どうしたことであろうか、誠に残念であるが、殆どと言って良いほど、参考になる情報は得られなかった。

そこで、小生が21年前に提出した日本生協連への出張報告書を捜し出し“西暦2000年の協同組合”のための、小委員会である参考グループ（Reference Group）における論議の様態を伝え、記憶を蘇らせつつ、レイドロー氏の人となりについて、感じたことを述べてみることにした。

また幸いにも、丁度この文章を書き始めた時に、レイドローの生涯についての小論文を、

カナダの、BC州の協同組合研究所長である、イアン・マクファーソン教授より頂くことができたので、本人の了解のもとに、その内容の一部をも活用させていただくこととした。

起草のための

レファレンス・グループのメンバーたち

“西暦2000年の協同組合”の執筆のために資料を提供し、内容を議論する参考グループは、ICAの各専門委員会の議長と事務局で構成されることになった。1979年のことである。しかし、当時の各専門委員会議長には、社会主義国からの代表は、入っていなかったため、上記メンバーに加えて、社会主義国から2名と、さらに途上国の開発計画担当が1名加えられることになった。

第1回の会合は、1979年6月28日と29日の両日にわたり、ロンドンのICA本部で開催された。その議事録が送られてきてから、日生協の中林会長は、これは将来の方向を決める極めて重要な会議であるとして、日生協からの参加を急遽要請したのであった。

ICAの承諾のもとに、中林会長代理として、第2回目の委員会（実質上最終の委員会）に小生が出席する機会を与えられた。

1979年12月の6～7日にかけて、ICA本部で会合が持たれた。当時ICA本部は、ロンドンのハイド・パークに程近い、グロベナー・ストリートに面した、棟続きのマンション風の建物にあった。

出席者はレイドロウ氏をふくめ、約25名であった。日本からは、勿論小生一人であったが、農林中金からICAへ出向していた碓井氏が、事務局の一員として出席していた。

ICAの故 S.K.サクセナ専務 (Director)が議長をつとめられた。

小生は、その時に初めてレイドロウ氏を紹介されたわけであるが、穏やかに話す、謹厳実直そうな人柄であるとお見受けした。

マクファーソン教授は、レイドロウ氏自身のキャリアから、身についたものかもしれないが、彼は教師のように、そして仲裁者や、または公務員のように静かに話すで紹介している。

会議の最中の彼の発言は、確かにそのようであったが、確信に満ちた発言は、参加者を納得させるものが、十分あったように記憶している。しかし論議の伯仲のときには、譲らない頑固さの一面も覗き得たような気もしている。また、体つきは、カナダ人としてはやや小柄にもみえた。すでに執筆のため、ロンドンに居を構えておられ、日常の生活は奥様が気を使っておられたようである。

さて、委員会では、第1回の委員会および10月に持たれたシンポジウムの報告がなされ、レイドロウ氏からは、第1次案の骨子が説明された。各専門委員会の議長より、それぞれの分野ごとの、関心事となっている課題を、文

章の中に入れるようにとの強い発言が続いた。

例えば、労働者生産協同組合の委員会からは、労働者協同組合の重要性とか、モンドラゴンのこと、消費者委員会からは、生協の位置づけの強化、保険委員会からは、特に保険の分野で顕著になっている多国籍企業との闘いについて、農漁委員会からは、世界の食料問題について、教育委員会からは組合員むけの情報強化、その他の委員会からは、女性の参加、労働者の参加、民主主義の問題などなどが出された。

参加、核の問題など幾つかの提言

小生は当時、日生協でも議論していた幾つかの点について、出発前にも打ち合わせ、報告提案を行った。

まず第一に平和の問題であり、核兵器の廃絶についての記述を要求し、ノー・モア・第3次世界大戦の気構えを示そうと訴えた。

第二に、日本の班活動の例をあげて、希薄になっている組合員の、積極的な参加の重要性を訴えた。

第三にコンピュータによる消費者管理が進むなかでの、消費者主権の確立と運動の強化を訴えた。

第四は、当時、生まれたばかりの子供が西暦2000年には成人して組合員となるので、そのためにも、今から協同組合教育を重視して行こうというものであった。

第五は消費者委員会のハンセン氏 (デンマーク)の発言 (消費者の政治的イニシアティブを促進する立場の最先端に生協を位置づけるな

ど)を支持し、新しいコンシューマリズムについて記述するよう要請し、安全、安心のコープ商品についての日生協での経験などを紹介した。

これらについては、出席者の多くの賛同を得られたものと思っている。

特に、レイドロウ氏は、他の委員の発言についても、そうであったが、小生に対しても一つ一つ丁寧に答えてくれたように思う。

班の問題については、知らなかった、大いに参考になるとも言われた。小生は班についての資料をレイドロウ氏に手渡していたのである。

平和問題については、ICA事務局のオールマン氏などからは、日生協の中林会長はいつも平和問題で、イニシアティブをとっており、これは極めて重要であると、応援発言までいただいた。

レイドロウ氏は、それについては何も答えなかったように記憶しているが、執筆された最終の提案文書では、第1章“1980年大会の展望”の最後のパラグラフにおいて、平和の大切さをのべ、核戦争の危機について、的確な記述をしているのである。

すなわち“我々は究極的な核戦争の脅威を忘れることはできない。しかしまた、絶滅の危機が人類に迫っていることを簡単に忘れてしまっている。原子物理学者たちは、この世の終わりをつげる象徴的な時計を持ち、国際的な緊張と戦争の脅威が増大し、または和らぐのに応じて、その針を前後に動かしている。人類最後の時は、真夜中の12時である。

1979年の終わりに、彼らは7分ほど時計の針

を進めた”と(筆者訳)。

生協には殊の外評価が厳しかった

しかしながら、レイドロウ氏は、コープ商品の話になると、極めて厳しい口調で、否定的ともいえる説明を行った。

危険な商品が、大量生産、大量消費のもとに氾濫していることに対し、安心、安全に基づく消費者運動の成果として、コープ商品が生まれ、生協運動のシンボルにもなっているといったようなことが、小生の説明であったと思う。

レイドロウ氏は、カナダで経験した例であるとして、概ね、つぎのように述べられた。“コープ商品の品質などで、問題が発生すると、生協の信用にもかかわり、他の一般の商品の供給にも影響が現れ、生協の存立をも危うくする。だからコープ商品には賛成できないのだ”といった論旨であった。

小生が、その説明に納得できなかったことはいうまでもない。

そのような状況があればこそ、コープ商品の開発には慎重を期さねばならないわけであるし、それが直ちに、コープ商品の否定には結びつくものではないと、当然のことながら考えたからである。彼の論は今日でいうコープ商品神話(無批判的にコープ商品の品質を信奉すること)否定とも、ややニュアンスは異なっていたのである。

勿論、最終文書にコープ商品のことは、記述などされてはいない。

さて、そう言った商品論だけでなく、全般

的にみて、生協については、かなり厳しい見方をしておられたのである。

最終提案文書でも、各所において生協の現状にたいして、否定的な記述が多くみられることは、文書を一読されれば、だれの目にも明らかになることである。

どうして生協に、このように否定的なのかとは、日本で学習会をするたびに出た疑問であった。

当時、大量生産、大量消費のために小売業界も近代化、大型化が進み、競争が激化しはじめていた。生協が、特にICAの主流であった欧米の生協が、競争の波に巻き込まれ、自らの協同組合としての特性を喪失しつつあった状況にたいして、大きな警世の書として提起されたものでもであると、理解はされた。

しかし、これは欧米の問題であり、日本の状況とは違ふと考え、それが日本にも、やがては出現するかも知れない危機の問題として、どれだけの人がとらえていたかは、全くの疑問ではある。

しかしながら、それでもなお各所にみられる、生協否定的な文章には、どうしても心の中にひっかかり、忘れ難いものがある。

例えば、第四の優先分野のなかで述べている“協同組合地域社会なるものをつくりあげるため、都市の人々に強力なインパクトを与えるには、例えば、日本の総合農協のように活動が総合的でなければならない。その点では従来型の生協では不十分である。なぜなら都市の住民にたいし、多くの問題の局面をそのままにし、手をつけていないからである”（筆者訳）などである。

トラウマとなり死期を早めた2つのレポート

さて“西暦2000年の協同組合”の文書として、社会主義国の協同組合をどう扱うかが委員会での大問題となった。それは一口でいうならば極めて激しいやりとりであった。

小生は出張報告書では勿論のこと、諸会合などで、双方が頑として譲らず、対立したままで終わったことについて、日本の、いやアジアの人々のやり方であれば、どこかに妥協点を見つけて、円満にことを運ぶのにと、もらったものである。

さて、レイドロウ氏とソ連の代表には、それぞれ強い自負と威信がかかっていたのである。

レイドロウ氏は正式にICAから委嘱をうけた執筆者であり、大会での提案者でもあるとの責任感と威信がみなぎっていた。

社会主義国を代表する、ソ連セントロサユーズの国際部長であるクラシェニニコフ氏や、同じくセントロのアルツシェル氏には、社会主義国のことは、西側の人には任せられない、そして大会はモスクワで行われるのだとの気負いも感じられた。

クラシェニニコフ氏は、はねつけるように発言した。レイドロウ氏の論文がまだ出ていないこと、そして素案でも社会主義国の扱いが不当に小さく、内容が正当に扱われていないので、社会主義国は独自の文章をすでに作成した。社会主義国は西暦2000年を協同組合の発展する輝かしい未来として考えており、レイドロウ氏のえがく灰色の世界とは全く違っていると。

レイドロウ氏も負けてはいなかった。すで

に書かれたという社会主義国の文書を提出してほしい。それを尊重して社会主義国の章を自分が書く。いかなる国であれ、その国の文章がそのまま載るのであれば、自分など必要ないのだ。そして、自分はアメリカであれ、批判するところはするのだとも言い切り、ソ連の提案は受け入れられないと、気骨のあるところを示したのであった。

かなりのやり取りの後、アルツシエル氏は、社会主義国の代表、レイドロー氏、ICA事務局の三者で再度話し合うことを提案したが、これもレイドロー氏によって拒否されてしまった。

サクセナ氏は、レイドロー氏が社会主義を含め文章を書き、翌年2月に再度この集まりを持ち、決着をつけるとの妥協案を提出したが、これも不成立となってしまった。

最終処理については、ICAのケリネック会長（フランス、当日欠席）と相談して決定すること、気まずい雰囲気のまま会議は終了した。

結果はいうまでもなく、1980年10月のモスクワ大会には、レイドロー報告と、社会主義国6カ国の共同報告の、2本立ての報告がなさ

れたのであった。

当時の社会主義国が、自分たちのことについて、西側によるスケッチを許す筈も無かったことを、レイドロー氏は知らなかったのであろうか。或いは知りつつも、敢えてそこは頑張ったのであろうか。

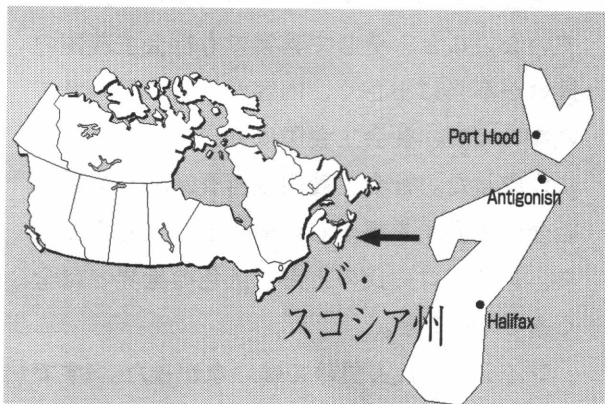
いずれにしても、この結末はレイドロー氏にとって、かなりのショックであった筈である。

2つに分離されてしまった西暦2000年の協同組合の文書は、いわば彼の心にトラウマ（精神的外傷）となって彼を苦しめ、彼の死期を早めたともいえるのである。

ICA元事務総長のソーダソン氏が小生に語ったところによれば、大会後、モスクワからの帰路、当時のレニングラードまでの車中で、ずっとそのことについて、レイドロー氏は、いたく慨嘆されておられたとのことである。

それから間もなく、翌月の1980年11月に72才でこの世を去った。突然の心臓発作によるものであったとのことである。

以上は、いわば歴史の裏舞台からみたレイドロー像の一部ではあるが、彼とその性格を知るには良い事例ではなかろうか。



生い立ち、そして専門は成人教育

カナダの大西洋岸に面して、耳のように突き出したノバ・スコシア州がある。

レイドロー氏は1908年に、同州のケイプ・ブレトン島 インバネス郡のポート・フード (Port Hood) に生まれた。スコットランドとアイルランド系の移民による鄙びた漁村で、彼

の家系はスコットランド系であった。

現地の高校のポート・フード・アカデミィを卒業後、ノバ・スコシア本州にある、アンティゴニッシ (Antigonish) の、聖フランシス・ザビエル大学 (St. Francis Xavier Univ.) に入学した。

彼は大学では英文学を専攻し、1929年に文学士、そして1931年には修士号を得ている。

1929年から1940年までは、生まれ故郷にもどり、高校の校長を勤めた。

それからさらに、1933年から2年間、彼はトロント大学に通い、教育学士号を取得した。

それと丁度時期が重なるが、ノバ・スコシア州教職員の労働組合運動にも関係し、1938年から議長に選ばれ、2年間その任にあたった。

彼の活発な社会的活動がスタートしたのであるが、もっぱら教育方面が中心であった。

アンティゴニッシ郡の視学官や、州の教育部署の仕事、教育誌の編集などにも携わった。

1944年には、聖フランシス・ザビエル大学の教育学部の学外教育部局 (Extension Dept) に副部長として12年間務めることになった。

この間、彼は博士号を、1950年代に取得したが、専門分野は成人教育であった。

アンティゴニッシ・ムーブメントと協同組合の地域社会建設

彼を協同組合運動に駆り立てたのは、実にこの学外教育計画に基づく成人教育であった。

この計画に基づく運動は、聖フランシス・ザビエル大学のある町 (町を含め州全体で人口約5万人) の名前を冠して、アンティゴニッシ・

ムーブメントといわれているが、正に、各種協同組合を組織し、町の活性化を図る地域おこし運動であった。

彼も、この運動の本拠地に身をおいたわけであるが、故郷のポート・フードで教鞭をとっていた時に、既にこの影響を受け、生協やクレジット・ユニオンを現地に組織したりもしている。

この運動について、エンサイクロペディア・アメリカナにある説明をみてみよう。

“協同組合企業組織と成人教育を結合させ、第一次産業と労働者の経済状態を改善させることを目指すカナダの運動である。

1929年に、アンティゴニッシの聖フランシス・ザビエル大学の学外教育部局より、スタートした。第一次世界大戦後、不況下の漁村復興計画として、漁業省の委嘱により、神父である大学のM. コーディ (Moses M. Coady) 博士が漁村調査の末、協同組合により疲弊した漁村の復興を提唱したことに始まる。

その結果UMF (United Maritime Fishermen) がハリファクス (Halifax) に組織された。

その後、漁村のみならず、都市においても生協、クレジット・ユニオン、住宅協同組合、生産協同組合が組織され、それらを通じて地域社会の復興が図られた。

1950年には、この運動を世界にも広めるため、コーディ国際研究所 (Coady International Institute) が大学に設立され、世界各国からの留学生を教育している”云々とある。

なお、ジャック・シェイファーの協同組合の歴史辞典には、コーディ氏以外にも、幾人かの、この運動の創始者たちの名前を紹介し

ている。マクドナルド(A.B.MacDonald)、ロムキンズ(R.P.Romkins)、神父のトンプキンズ(J.Tompkins)、および大学の学外教育部局の人びとである。これらは皆、レイドロー氏が私淑した人びとであった。

このように、彼の辿った道筋をさかのぼり、訪ね求めてみると、このアンティゴニッシ運動に行きつくのである。

そして、彼は熱心に、故郷の地域社会の復興を、協同組合システムの導入によってと考え実践した、アンティゴニッシ運動家であった。

彼が"西暦2000年の協同組合"の中で第四番目の優先分野として説く、"協同組合地域社会の建設"は、このアンティゴニッシの時代から生まれ、そして実践されてきたものを膨らませたものではなかろうか。

地方から全国、そして国際活動へ

地方の運動から、全国の運動(カナダ英語圏)に関係しだしたのは、1950年に協同組合生命共済(Co-operative Life Insurance Co.)の役員になってからであった。

そしてさらに、1958年から1968年まで、カナダ協同組合連合会(CUC、今日のCCAの前身)の事務総長(General Secretary)に任命されることになった。

マクファーソン教授は、彼の連合会時代の活動について、5つの面での評価をしている。

第一に協同組合各分野の利益を代表した。

第二に、基金を造成し、特にイヌイットおよび西インド諸島の協同組合を援助した。

第三に労働組合と緊密な関係樹立を図った。

第四にダイレクト・チャージ(原価販売でコストを請求)コープを組織した。

第五に協同組合研究を促進したとしている。

勿論、これらの活動を一人ではやり得ないことはいうまでもない。ただ彼が大いにイニシアティブを発揮したということであろう。

彼は1971年から1974年まで、住宅金融公庫(CMHC)の理事を務め、住宅協同組合運動の発展に尽くしたといわれている。

彼が国際舞台に登場するのは、カナダ政府の海外協力機構(CIDA)の特別顧問に任命されてからであった。このコンサルタントとしての活動時期は、1974年から、正に彼の死去の時まで続いたわけである。

CIDAは、カナダ協同組合連合会やデジャルダン運動と連携して、国際的に協同組合の支援を行っている組織である。

もっとも、以前にもインド(1956~1958年)やセイロン(1966~1968年)にも、協同組合支援のために滞在したことがあった。

日本の農協(岐阜県といわれている)を訪問したのもこの期間中のことらしく、その総合性と地域へのサービスについて、これこそ心に抱く協同組合地域社会のモデルであるといたく感心したのであった。

協同組合セクターの確立をめざして

さて、以上が小生に割り当てられた、レイドロー氏についての紹介文であるが、"西暦2000年の協同組合"について若干コメントをし、終わりとしたい。

レイドロー氏が情勢分析し提起した問題点

と、そこから導き出された四つの優先分野の課題は、今日でも基本的に生きており、有効であると思われる。

ICAのケベック大会（1999年）においても、当然のことながら、レイドロー氏の問題提起は正しかったとの評価が行われた。

言うまでもなく、20年まえと比べ、情勢は大きく変化してきている。

いわゆる旧社会主義国の協同組合は、崩壊し、新たに自主的なものとして再生を成し遂げつつある。

このような時、彼が力をこめた四つの優先分野の基礎ともなっている、協同組合セクターの確立（第3章7項）の意味の重みを実感するのである。

彼は自身を G.フォーケ(Georges Fauquet)に列なる協同組合セクター信奉派であると述べている(協同組合と貧困)。

そこでは、政府や私企業と異なる協同組合のアイデンティティを明確にするべきことを述べている。

今日では、協同組合やミューチャル、非営利組織を含めて社会的経済セクターとする考え方や、社会的企業までも含めた経済分野の考え方も存在している。

社会的、経済的目的を達成するために、協同組合の側からは、同盟軍としてこのようにセクターの内容を膨らまして、種々考えることは有効でもあろう。

しかし同時にそのことにより、協同組合のもつ本来の性格をその中に拡散し、曖昧にしまつてはいけないと思うものである。

さて今日、必要なことは、先ずこの20年間の協同組合運動の総括を、それぞれの分野で、レイドロー氏の問題提起と関連させて行うことではなからうか。

そして、レイドロー氏が指摘した、協同組合が持つ多くの弱点を克服し、新たに21世紀の協同組合運動の発展にむけて、新しい優先分野の設定と、その取り組みを強化すべきときに、我々は今いるのである。

参考資料

- * Laidlaw, A.F. : Co-operatives in the year 2000. ICA、 1980
- * ICA : Reput of the Meeting of the Reference group 28/29、 June 1979
- * 大谷 正夫 : 委員会参加出張報告書、 1979
- * MacPherson I. : A.F.Laidlaw : The Leadership of a Flexible Mind. 2000
- * Encyclopedia Americana : Grolier inc.1996
- * Jack Shaffer : Historical Dictionary of the Cooperative Movement. the Scarecrow Press、 Maryland 1999
- * Laidlaw, A.F. : Co-operatives and the Poor. ICA、 1977
- * 大谷 正夫 : 協同組合の持続可能な発展を願って. コープ出版、 1998